

目次

キヤツスルフオード

5

訳者あとがき 401

解説 廣澤吉泰 405

主要登場人物

- ウイニフレッド・キャッスルフォード……………キャロン・ヒルの女主人
フィリップ・キャッスルフォード……………ウイニフレッドの夫
ヒラリー・キャッスルフォード……………フィリップの娘
コンスタンス・リンドフィールド……………ウイニフレッドの異母妹
ローレンス・グレンケイブル……………ウイニフレッドの義弟。医者
ケニス・グレンケイブル……………ローレンスの兄。ビジネスマン
フランシス・グレンケイブル……………ケニスの息子
ディック（リチャード）・ステイヴニッジ……………地元の若者
ハットン夫人……………シャレーの管理人
ジャック・ハットン……………ハットン夫人の夫
ガムレイ巡査……………サンダーブリッジの巡査
ウエスターハム警部……………地元警察の警部
フェリーヒル巡査部長……………地元警察の巡査部長
リップンデン医師……………監察医
オリヴァー・レニシヨ……………検視官
クリントン・ドリフィールド卿……………警察署長
ウエンドーヴァー……………治安判事
テンベリー……………公共図書館主任司書
ペンドルベリー医師……………サニーサイド病院の医者

第一章 第一陣営

幅広の階段を下りてきたフィリップ・キャッスルフォードの耳に、閉じた応接間のドアを通して、突然沸き起こった笑い声がかすかに届いた。二人の男たちの低い声に交じる、妻の耳障りな忍び笑い。その声にキャッスルフォードは一瞬ひるみ、こみ上げた怒りを吐き出した。低い呟きだっただけに、いっそう苦々しさが増す。

「まったく、あの連中ときたら！」

その短い罵りの対象は、キャッスルフォードの妻、彼女の最初の夫の兄弟二人、そして、妻の話し相手であるコンスタンス・リンドフィールドだ。敵意を感じさせる一団に向き合う勇気を掻き集めようと、階段の袂でしばし躊躇う。しかし、キャッスルフォードの内なる葛藤は、まだ見ぬ結果を恐れての気後れのようなもので、単なる見せかけに過ぎなかった。その夜、どうしても応接間に踏み込む気持ちになれないことはわかっていた。それでも、何とか自尊心を奮い立たせるためのささやかな試みとして、例の一団に加わるかどうか、考えるふりをしていたのだ。

キャッスルフォードにとって、グレンケイブル兄弟の訪問は決して歓迎できるものではなかったが、その日のデイナはこれまで以上に不愉快なものだった。テーブルの上座に座る彼は、名目上、この家の主だったが、全員からほぼ完全に無視されていたのだ。会話に加わろうとしても、冷たい視線を

向けられ、そつけない返事を返されるだけ。すぐにほかの誰かが別の話題を持ち出し、彼はのけ者にされる。あからさまに無礼というわけではないが、キャッスルフォードの話には一切関心を持たないという態度を、彼らは明らかに示していた。大人の会話に無理やり割り込もうとする子供なら、そんな態度を取られても仕方がないかもしれない。正確には無視とは言えない。しかし、結果的には同じことだ。

娘のほうは、もう少しましな対応を受けていた。何はともあれ、それは感謝すべきことだろう。赤ら顔のケニス・グレンケイブルが、時折、無感情な目を娘に向けては、テール越しにぼつぼつと話しかけていた。もちろん、ヒラリーの存在を十分に意識した上で、彼女が勝手にしゃべらないようにするためだ。ローレンス・グレンケイブルのほうは、もう少し思いやりがあった。彼なりの幾分皮肉っぽい方法で、娘に話をさせようとしていた。しかし、彼女が二言も話そうものなら、すかさず継母かコンスタンス・リンドフィールドが巧みに彼女を会話から締め出し、話題を別の方向に変えてしまった。

その夜のデイナーで、キャッスルフォードが一番腹立たしかったのは、彼が口にするパンの一切れでさえ、グレンケイブル家の金で支払われていることだった。そして、その事実を二人の兄弟が決して忘れていないということ。彼の妻は、グレンケイブル一族の三代目当主の未亡人だった。裕福な男で、今やその全財産を彼女が享受している。ローレンスのような町医者や、ケニスのように日々戦いに明け暮れるビジネスマンが、自分たちの代わりにのうのうと暮らし、兄が残した財産を共有するよそ者を妬むのは当然だろう——まして、ろくでもない一文無しの芸術家なんて、なおさらのこと。彼らとのあいだに何か共通点でもあれば、キャッスルフォードもその溝を埋められたかもしれない。

しかし、あの兄弟たちときたら、共通点など何一つないことを立証するために躍起になっているようだった。コーヒーの時間になり、女たちが部屋を出ていったあとも、二人の兄弟はブリッジのことや（ブリッジなんてキャッスルフォードは大嫌いだった）株の相場のこと（そんなものには興味のかけらもない）、自分たちの知り合い（彼が一度も会ったことのない人々だ）について話していた。戦略的に談笑から締め出されていたのだ。テーブルの上座に座っていても、二人の兄弟にとってキャッスルフォードは主でも何でもなかった。加えて二人は、キャッスルフォードをどう見ているのかを隠すのに何の努力もしていなかった。

応接間に移るために立ち上がったところで、キャッスルフォードは二人の元を離れて二階に上がった。何かを忘れたとか、必要なものがあるとか、そんな情けない言い訳をして。予想通り——二人に彼を待つ様子はなかった。そうしたければ書齋に逃げ込むこともできるだろう。自分を望む人間が誰もいないのであれば。

応接間の閉ざされたドアにじっと目を据えたまま、まだ見ぬ結果についてぐずぐずと考えているうちに、階段の上で軽い足音が響いた。裁縫箱を手にした金髪の娘が、優雅な物腰で下りてくる所だった。キャッスルフォードは彼女を通すために脇に避けた。

「応接間に行くのかい、ヒラリー？」近づいてきた娘に彼は尋ねた。

返ってきた娘の口ぶりは、完全に他人事のようにだった。

「あんなところに入るつもりはないわ」

キャッスルフォードはもつともだろうと思った。二十歳のヒラリーは、いとも簡単に男たちの目を継母から引き剥がしてしまう。娘にはライバル意識などかけらもなかった。しかし、十五歳年上のウ

イニフレッドにすれば、可能な限り、比較される危険は避けたいだろう。はつきりと言われたわけではない。それでも、男の客がいるときには、適当な口実を作つてその場を離れるのが、継母にとつては何よりであることをヒラリーはしっかりと理解していた。ウイニフレッドは、男たちが血の繋がらない娘を相手に時間を無駄にするのではなく、自分と話をすることを望んでいたのだ。

娘とのちよつとした会話が自尊心を黙らせる言い訳になった。何と言つても、妻とグレンケイブル兄弟は家族のようなものなのだ。彼らがグレンケイブル家のことを話し合いたいと思つていながら、その邪魔をしないようにするのは、それなりに筋が通つている。

書齋へ向かう途中、ヒラリーがホルルのテーブルに置かれたままになっているものに目を留めた。

「グレンケイブル先生の鞆じゃない？」通り過ぎながら、彼女は何気なく訊いた。「控えの間にお持ちになればいいのに」

「手間を省きたかつたんだろう」父親は答えた。「きっと、新しいインシュリンを持つてきてくれたんだよ。最後の一箱もなくなりかけていたから」

確かにローレンス・グレンケイブルは、あの薬でウイニフレッドの病状を改善させた。キャッスルフォードもその点は認めている。厳しい食事制限と、お茶やコーヒーの砂糖代わりにサッカリンを使うことを別にすれば、明らかにほぼ正常な状態に戻したのだ。妻が医者を信じ切つても当然のことだろう。それがあの医者に、妻に取り入る手づるを与えたのだ。その考えに、キャッスルフォードは顔をしかめた。その後、その手づるがどのように利用されたかは容易に想像できる。彼の妻は、自分の考えを隠しておけない女だった。彼女が時折漏らす言葉の端々から、グレンケイブル兄弟が妻の意思を変えるために用いている手練手管を予測するのは難しいことではなかった。

自分の娘は、こうした状況をどの程度把握しているのだろうか？ ヒラリーは決して、捉えどころのない娘ではない。それでもキャッスルフォードには、彼女が何を考え、どのくらいのこと気づいているのか、わからなかった。継母がそばにいるときには、常に用心深く口をつぐんでいる娘だった。キャッスルフォードは、自分の正確な立場についての説明をずっと避けてきたのだ。時折、娘が継母の指示に逆らうことがあっても、家庭内の平和を保つため、彼は個人的な理由からこう訴えることしかできなかった。「頼むから、お父さんのためにそうしておくれ。争い事は嫌いなんだよ」ヒラリーは父親のことが好きだった。これまでのところは、難なく妥協してくれた。しかし、その娘も成長した今、遅かれ早かれ、説明しなければならぬときはやってくるだろう。

書斎に入ったヒラリーは、自分の椅子の近くに読書用ランプを置き、縫物を始める準備をした。娘が腰を落ちつけたのを見届けた父親も、ゆったりとしたアームチェアを選んでそのそばに腰を下ろした。小さく安堵のため息が漏れる。少なくともここにいれば、自分の生活の背景を織りなす小さな悪意や不快な出来事から逃れることができる。

しばらくのあいだ、ヒラリーは自分の針仕事に没頭していた。それが不意に、顔も上げず、ことさら呑気な口調で彼女は話し始めた。

「今夜、グレンケイブルさんたちが食事にいらっしやるなんて、知らなかったわ」

「わたしも知らなかったよ。身支度合図のベルが鳴るまで」キャッスルフォードは素直に認めた。「二階に上がるときになって初めて、彼女から聞いたんだ」

父と娘のあいだで、継母を名前で呼ぶことは決してない。ウィニフレッドは常に「彼女」だった。八年前、キャッスルフォードと結婚したとき、彼女は義理の娘に「お母さま」と呼ぶように言った。

しかしヒラリーは、面と向かつて拒否することはなかったものの、ウイニフレッドに話しかけるときには常に呼びかけ言葉を省くことで、巧みに逃げを打ってきた。第三者に対しては、キヤッスルフ・オード夫人と呼んでいた。

父親の最後の言葉に対して、彼女は何も言わなかった。縫物に集中する娘の姿を、キヤッスルフ・オードは穏やかな満足感とともに見つめていた。この家で、自分は軽蔑の対象かもしれない。しかし、ヒラリーについては何の欠点も見出せないはずだ。読書用ランプが娘の横顔を照らしている。カメラのように端正な顔立ち。キヤッスルフ・オードはその造作の一つ一つを、細密画を諦めてしまった日の後悔とともに眺めていた。かつて自分が使ったどのモデルよりもいいモデルになったことだろう。周りに男たちがいるときに、ウイニフレッドがヒラリーを遠ざけておくのも無理はない。明らかに残忍な満足感を抱きながら、彼はそう考えた。これほどの娘では、三十五歳という年齢そのままの妻の引き立て役には決してならないのだ。それに、ウイニフレッドには、天秤にかけるほどの知性もなかった。あのわざとらしい、だからとした話し方で彼女が語るのは、つまらないことに対するつまらないおしゃべりばかりだ。最近の出来事に関する知識も、新聞の挿絵から得たものばかり。熱心に読むのは、ある種のでっちあげ記事——常識はずれ——としか思えないような記事だけだ。夢中になる話題と言えばドレスについてだろうか。それでも、かなりの金を自分のワードローブに注ぎ込んでいるにもかかわらず、わずかな小遣いでやりくりしているヒラリーの成果にも及ばない。

キヤッスルフ・オードはポケットから小袋を取り出し、パイプに莧たぶを詰め始めた。莧は自分の金で買っている。いずれにしても、それだけはグレンケイブルの金で買ったものではないから、何の言い訳もなしに楽しむことができた。火皿に莧を詰めているのは左手だ。彼の右手には、人差し指と中指の

第一関節までがなかったから。しかし、そんな状態も長年のことで、器用に莖を詰める仕草には何のぎこちなさもなかった。

「そう言えば、ウイニフレッドは今夜、夕食のためにあの子に遅くまで起きているのを許していたな」パイプに火をつけると、キャッスルフォードは呟いた。「父親が来ていたからだろう。あの子のお行儀はちつともよくならないな」

あの子^グというのは、ケニス・グレンケイブルの息子のことだ。ケニスはここから五十マイルほどのところに住んでいる。その息子が学校の休暇中、最近罹った病気の療養のために、キャッスルフォード家に預けられていたのだ。青白くたるんだ顔をした子供だが、子宝に恵まれなかったウイニフレッドにとつては大のお気に入りだ。このフランスシスという少年も、グレンケイブル兄弟が仕掛けてくるゲームの手先なのではないか。キャッスルフォードは、そんな疑念を抱いていた。

「コニー・リンドフィールドがあの子にプレゼントをあげたのよ——鳥撃ち用のライフルなんだけど」ヒラリーが不意に口を挟んだ。「今日の午後の郵便小包で届いたの。早くそれで遊びたくて、デイナーなんかさっさと終わらせてたくて仕方なかったでしょうね」

「あの子向きのおもちゃとは思えないな」父親の口調は不安げだ。「この辺で銃を撃ちまくるようになったら、人を近づけないようにしなきゃならない。注意力なんてかけらもない野蛮児なんだから。あつと言う間に大変なことになってしまう」

「あの子だったら、とんでもない小悪魔なのよ！」ヒラリーが割って入った。「今朝、車から降りようとしたときに、ガレージのそばで見かけたんだけど。何をしていたと思う？ どこからか、みすばらしい黒い子猫を見つけてきて、バケツに張った水に沈めて溺れさせていたんだから。モップで上から押

さえつけて。もうこれで最期っていうときに引き上げて、息を吹き返らせる。そして、また沈めるの。『楽しみは引き延ばさなきゃ』現場を取り押さえたとき、あの子ったら、大真面目な顔でそう言ったのよ。やめさせたわたしのことを、きつと恨んでいるでしょうね」

「そのことで彼女ともめないでくれよ」キャッスルフォードは娘の目を見ずに呟いた。

父親の声に不安を感じ取ったヒラリーは、自分の針仕事に目を戻して答えた。

「大丈夫よ。そんなことをして何の意味があるの？ あの人には、お気に入りのフランキー坊やの肩を持つに決まっているもの。どうでもいいことでトラブルを引き起こすだけよ。あの子だって、嘘をついて言い逃れるんでしょうし。ものの善悪というものがわかっていないんだわ、あの子」

「まあ、確かにあまり素直な子ではないがね」父親は認めた。「でも、いずれにしろ……」

ヒラリーは言いたいことを言ってしまったようだ。もう、話題を変えてもいいだろう。この家では、誰が不用意な発言を聞いているか予想もつかない。言葉は少なければ少ないほどいい。

「新しい夜会服を縫っているのかい？」娘の針仕事を見ようと、身を乗り出してキャッスルフォードは尋ねた。

ヒラリーのほうでも、父親が話題を変えたがっていることに気づいていた。膝から布を持ち上げ、相手によく見えるよう広げてみせる。しかし、いかに興味深そうに見つめていても、キャッスルフォードの思いは、どこかほかの場所にあるようだ。ヒラリーは手先が器用だった。もし、然るべき訓練を受けさせてやることができたなら。そして、元手を出して商売を始めさせてやることができたなら、この娘も自立できていたかもしれない。しかし現実には、彼の願望とは似ても似つかない状況だった。

ヒラリーが茶色い大きな目で見つめているのに気づいて、キャッスルフォードは我に返った。

娘は何か言いたそうにしている。今、この話題を持ち出しても大丈夫だろうか。今夜の父親は、いつも以上に不安げに見える。もしかしたら、また別の機会にしたほうがいいのかもれない。いくら何食わぬ顔でやり過ごそうとしても、最近の父親ときたら、すっかり心配事に捕らわれてしまっているのだから。しかし、何かが背中を押したのだろう。ヒラリーは話してみることにした。

「わたしのお小遣いを上げてくれる余裕なんて、きつくないわよね、お父さん？」

その要求に、思わず目をぼちくりさせている父親を見て、ヒラリーは慌てて声を落とした。

「あの、どうせ無理だとか、そんなふうにいるわけじゃないのよ。ただ、もうちょっとだけ、そうしてくれる余裕はないかしらと。思って。ものすごくお金が足りないものだから」

父親の表情の変化は、とても無理な相談を持ち出してしまったことを意味していた。

「やっぱり、無理よね」父親の言葉を先回りして、ヒラリーは相手を庇った。「ひよつとしたらと思つて、訊いてみただけ……」

こんな話、持ち出さなければよかつたとヒラリーは心から悔やんでいた。父親がすでに抱えている心配事を、さらに増やしてしまったことが悲しかった。この父親なら、断らなければならぬことに心も痛めてしまうだろう。いずれにしても、今のお小遣いで何とかやっていけるはずだ。それはつまり、自分で思う以上に何度も、同じドレスを着なければならぬということだけだ。十六、七歳の娘に与えられていた小遣いが、四つも五つも年齢を重ねたあとも同じ額だなんて信じられない。いくら彼女が、自分のものは自分で作り、出費を抑えたとしても、最近のお財布状況はかなり苦しくなっていた。それに、彼女はドレス類が好きだった。男たちの気を引くためにドレスを着る娘たちがいる。周りの女性たちよりも目立つたためにと考える娘も。しかしヒラリーは、まず第一に自分が楽しむ

〔著者〕

J・J・コニントン

本名アルフレッド・ウォルター・スチュアート。スコットランド、グラスゴー生まれ。グラスゴー大学で化学を専攻し奨学金を得てロンドンの大学へ入学、同校で研究を続ける。推理作家としては『或る豪亭主の死』（1926）でデビュー。クリントン・ドリフィールド卿が活躍する Murder in the Maze (27)、ロス警視の登場する The Eye in the Museum (29) など、24冊のミステリを刊行した。

〔訳者〕

板垣節子（いたがき・せつこ）

北海道札幌市生まれ。インターカレッジ札幌にて翻訳を学ぶ。訳書に『白魔』、『ウィルソン警視の休日』、『J・G・リダー氏の心』（いずれも論創社）、『薄灰色に汚れた罪』（長崎出版）、『ラプレスキューは迅速に』（ぶんか社）など。

キャッスルフォード

——論創海外ミステリ 238

2019年8月20日 初版第1刷印刷

2019年8月30日 初版第1刷発行

著者 J・J・コニントン

訳者 板垣節子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1853-5

落丁・乱丁本はお取り替えいたします